

嵯峨の屋おむろ『守錢奴の肚』の翻刻および注釈(2)

三 川 智 央

翻刻

【本文】

○第五回

井戸端は裏店社會の議事場なりとは口さがなき京わらんへの惡口御尤至極の事なり荒し吹く三室の山の神は隣家の寶を算へて惜しや飯をこがし滅多無上に娑婆ツ氣の勇み連は大平樂の巻物を廣げてボン／＼「たんか」を切る姑のやかましきを歎く嫁嫁のひきずりを誘う姑主人の使人荒きを恨む下女奉公人根性の骨惜を罵る内儀など四五人寄れば喧しき是ぞ浮世の人情歟彼大路次の井戸端に今朝も出遭ひし二個の職人一人は熊とて年頃は廿前後一人は八とて四十七八熊は楊子を使いながら顔を洗つてゐる八に向ひ(熊)昨夜はナアオイおらアあれから小柳へ

洋行しちやつたぜ (八) ナニ洋行……洋行テナどんなやつだイおらアまだ聴たことはネエ (熊) ヘンおめへ洋行一ツ知らねへのか正に明瞭と判然と慙然なやつだなア洋行テナアおめへ講釋師じやねへやこつちからあつちへ往くツていふことだ」(トやりこめられては八は誠に痛み入り口では笑ツて目で睨み) (八) 此畜生そんなことア誰だツて知ていらアワザトおれが知らねへふりをして居りやアいゝ氣になつて喋舌りやアがらア洋行とは此方より彼方へ往くことなりとチャンと本文に出ていらア (熊) ヘツ本文……本文もねへもんだ文盲メー無學の鼠輩のくせに手前たちやいくら臆たア叩いたツて無益なア國益といふことを爲ねへから國益を爲ねへけりやア人間の内へは這入らねへぜ予なんざア見ねへ此間國益をして朋友を驚かしてやつた (八) 「鈍兒」だなア此奴ア手前律を知らねへから爲やうがねへ國益なんぞを遣て見ねへ知れりやア直に懲役だぜ (熊) コイツア大笑た國益をして懲役になりつこじや薩摩屋なんざア年中懲役だと又一本遣られて八はしよげ返り中腰になつて頭から盥の水をザプリ手拭で頭を拭きつゝ (八) 小柳は誰が掛ツてるい (熊) 文敬ヨ (八) 何をやつてるい (熊) アノ鈴川に伊達ヨ (八) 伊達……そいつア面白かんべい (熊) おらア又ア、いふ御殿物よりか鈴川の様な世話物が好きヨ芝居でも何でもさうだぜ菊五郎の世話場と来るといゝからなア (八) こん畜生なんでも人が右ツていやア左リツて言ひ左リツていひやア右ツていひやアがらア (熊) 當りめへヨ爺株と若いものとは話が合はねへや折柄来る二個の女一個は二十四五のおきやんらしき奴一寸小奇麗な袷を着たり一個は五十四五の老女右手に手桶をひつ提げたり (二人) オヤたいさう遅いネおつかれ筋かい (と高詞子は若い女) 皆さんお早うございます (と静にいふは老女) (熊) お梅さん氣を附て口を利て貰わうかい獨物です此方や (梅) ヲやお氣にさわつたのかんにして頂戴 (八) 怖いよ熊は今朝は

誰にでも喰てかゝるから」と捨言葉早々と去る(梅) ヲヤさうこわいことホ…病犬見た様ネ(熊) へん人を馬鹿にしてるやアがらア」と顔を洗ふ(梅) そりやア戲言だヨ熊さんは温良やネ…おとなしいと言はお叔母さん 老女に向ひ ホラあすこの貸夜具屋のドラ息子ネ(老) ヘイあれがどうぞ爲ましたか(梅) アノなんですとサ此間叔母さんの一寸出た間に簞笥の錠を捻ぢ切てネ着物とお金を持出てからに今日で三日になるがまだ歸らないんですとさ憎らしいじやありませんかネ(老) へーさうですすか驚いた奴ですネエだが何ですヨあの貸夜具屋の細君もあんまり仕末を爲過るからですヨ自分で小金を貸すし其に此節はあなた金の成ル木が出来たのです物をちつとは息子にだつて遣れば宜んでさアネそれを遣らないから息子だつてやけを起してそんなひどいことをするのですヨ(梅) ヲヤさう私しやちつとも知らなかつたのヨそんなこたア此節が金の成木が出来たなんて羨ましいじや有ませんか何いふ譚なんですへ」と話の折柄彼燕口といふ男水汲みに来る(燕) なんだい又世上のあらで日を暮しかい水は汲めども直ぐには往かずほんとに手前ツちには困るの(二人) ホ…ア…相變らずサ(燕) なにか面黒いことでも有のかい(梅) ア大ありさお前のとこの隣の金の成木の一件サ(燕) へん金の成木もすさまじいッ彼な奴(梅) ヲヤ大層おけなしだネ○いつたい何いふ譚なんだいお前お隣家だからよく知つてるだらうお話しよ(燕) なアにつまらねへことさ斯ういふ譚なんざ彼家の息子の妹に御膳別品があるんさそれがツイ此間まで小何とか言て烏森に巢を構の軒には御神燈ぶらさげの妹虫ころゝの鮎蔦子藝者ヨ一寸見ると未通らしいがイザ應来と来るとなかゝ人見知をしない徒者ヨだからお前忽ち或る八字髻に見出されてネ…ナニサ今年のことさ今歳のたしか六月頃だつたらう…赤の飯に魚添へて仲間配りの泥足洗ひ今じや權君とか權妻とかに成上りの家へも月々金を送るといふので

お母どのはポツポ福々のお顔ニコくであるのヨ(梅) さう彼家のおばさん仕合ネそんな好娘をもつて(老) だから世間は色々ですヨ(燕) ホントにヨまだ吃驚仰天といふ話があるぜ(梅) オヤ嬉れしい事早くお話しヨヨ一燕口さん(燕) コリヤアなかく話せねへ(梅) イヤダヨ此人はなんぼ講釋師だつて後は明日の前講なんざアお氣か附れるヨお話しつてこつさアネー熊さんオヤ嫌だ熊さんはあるヨ(老) ほんとにお話しなさい燕口さん(折柄二三人の長家の女房達此處を通るお梅女はこれを見ると聲をかけ(梅) チヨットく皆お出くくい、話が在るからお出ヨ一(皆) 「ナニ」どんなことだ「なんだい姉さん(一度にいふ) 今ネ燕口さんがステキと面白い話をするとサ(燕) コリヤ恐入つたこんな面白い話を「ロハ」で爲ちやちツとあはねハヤ(梅) そりやおおるヨネ一(と皆々を見廻はし) サア奢るからお話しサアく(燕) それじやア話さうかの但し氣取るぜ(梅) アイヨ結構だネ(皆) 遣つたくくと五人等しく十の眼で燕口の顔をジツト見る燕口は咳一咳して井戸端を「トンくく」と叩き(燕) エ、いつの頃にやアリツラン神田區〇〇町に一個の清元の師匠が在りまして名を延羽根と申しましたが當年とツて廿一歳母はお熊といふて五十一歳親獨子獨の事なれば互に杖とも柱ともなりて其日を送りますが此延羽根といふ女、至て器量美しく(トンくく) 是は井戸側を叩く音是より調子づくくと知るべし) 脊は高からず低からず婉轉たる双蛾は遠山の霞の如く芙蓉の明眸可愛らしく丹花の唇、愛敬あり誠や沈魚落鴈の姿閉月羞花の粧あるとはかゝる美女をいふか實に(トンくく) 人間界の有にあらず月宮の嫦娥のゲドク(下濁) に降りしか龍宮城の乙姫が凡地に出づるかと疑ふ斗り之を古の(トンくく) 美人に比へて見んならば見ぬ唐の楊貴妃か我朝にては衣通姫か小町姫常磐御前か袈裟御前お晝御前か(トンくく) お夜食かといふイヤニ手數のかゝる女其上歌舞ス

イトン（吹彈）の業をよくし別きて三味線の妙手にて空飛ぶ鳥を止め水に潜む魚を躍らせるの術あり歌ハ聲はさながら鶯の囀るが如く梁の塵をも落すべく鬼神の心をも和ぐべし況して血氣剛らしき壯年をや指の先で三馬をも踊らせまじきものは去れば合壁に名を得たる腦天氣の熊さん煙草盆の虎さん「ガラツ」鉢の八さんなんどいふ二つ名のある一騎當千の若殿ばら（トン／＼／＼）吾れ射て取らんと小和田の里にあらねども駕籠も車もいるものかサツサ押せ押せと爺譲りの（トン／＼／＼）膝栗毛に二鞭加へて吾先きと夕暮時より延羽根の家を目掛けて詰寄たりされど（トン／＼／＼）此方は名にしおふ清元流の虎の巻手練の極秘手管の奥義を極めたれば寡をもて衆に當るの兼て期したる事なりと毫も遲疑する氣合なく片端から色目で撫付け世事で丸めてぐる／＼／＼／＼ツと（ト／＼）手に上せて終に己の弟子となせり然るに此處に一個の英傑こそ現はれ出たりそも此人は誰ならめ同町内に吝嗇をもつて名を得たる三星屋喜右衛門といふ者なり此人一度延羽根を見初てよりぞつと身に染む戀風の忘れんとするに忘られず寐ては夢起てはうつ／＼幻の夢になりとも彼人に心の内の切なるを知らせまほしと思へども思ふに任せぬ國の迎ひ親々に誘はれドツコイツツイ口がすべつた偕でこれより喜右衛門が此延羽根を手に入れませうや如何にそは明日の前講といたいて御退屈様（皆）オヤたいそう始は物になるのかと思つたら終は煙の様じやないか（梅）ア、ネもつとお話しヨヨヨ（燕）モウいやこの上話すと後でこまる煙の様などこでいくのさ今に此後狂言の筋書が出るヨが奢は何したんだい（梅）だつて皆な話さないんだものを」後は笑ふやら怒鳴るやらワー／＼と大騒ぎ抑も延羽根及び燕口は如何なる人物なるかそれを此種の物語に記すは餘り要なきに似たれど記さざれば衣服に袂なきが如く仕立上りの物とは言れじ故に一寸かいつまんで記すになん

延羽根は本名をお羽根といふ其父某は元は本郷の通に住へり代々相應の瀬戸物商なりしお羽根は獨子の事なれば蝶ヨ花よといつくしみかしづき幼き時より糸竹の道をさへに習はしたりされど瀬は淵となる浮世の習ひお羽根が十五の年隣家より出火して箸かたしさへ持たぬ丸焼流石は老店の事なれば忽ち金の工面をして元の處へ開店主は車輪になつてと思ふと又も翌年の出火で再び丸焼今度は金の才覚も付かず詮方なしに神田區の何町とかに借家住ひ如何かして今一旗と思ふと泣顔へ蜂の鄙諺通り借金が積の種となりて遂に其年の師走といふ月引汐と共にゴツクリ往生親父の借債は残る活計の道には詰る翌年はお羽根も十七なれどまだ世間白齒のおぼこ娘母親一個での心勞誠に氣の毒のことゝ信切なる人の世話でお羽根は清元の師匠を始め始は近所の小供のみなりしが腕のいくつで弟子も増へる借金は月賦で返す事となし辛く其日を送る内以前は恍惚としたお嬢様質も浮世の風に當てられ苦樂の波に揉まれて客扱も上手となり此頃では男女の弟子も殖るばかり以前の處は家も狭して借こそ今の處へ轉居せしなれ斯れば母親の喜びは一方ならず我家の米櫃娘本尊様とかしづけば延羽根も漸やく心驕りて絹布ものにかゝと打たせ箸さへ此ころは重さうな手附

燕口は何れの人なるか腕には分らず元は舊幕の御家人なりといふ人もあれど當人は土井家の藩士なりといふされど東京府士族の肩書は慥に表札に歴然たり一年斗り以前此處へ移住せしが極隨の怠惰者講釋を業とすれどヤレ今日

は頭痛がするのイヤ腹痛のと休むこと澤山又夜などは何れに泊るか歸らぬ事は屢なり或は二時三時頃に木戸を飛越

て歸ることもある由飛越る事ほんとに上手なり颯の木傳ふ如くなりといふなり又家に居る時は多くの人を集め世間の話をしては腮をはずさせ地口發言を口吟んでは臍の宿替をさす鮎や菓子を買ひには錢の切目至つてよく「なんぼ

獨身でもよくあれで暮らせる」とは近所の取汰沙今日も井戸端へ出て喜右衛門の噂すると(たまらない)一犬針程に吠えて萬大棒を傳へるが裏店の習ひ忽ちバツト爲た大評判呆れかへつて物がいはれないあの年で吝嗇がと驚く妻女の御託宜もあれば「どうしてあの喜右衛門が戀慕の聞いかさま思案外の感じじやまで」ト口をへの字にする書生もあり「それが燕口に知れたのが妙だこれが分らない」トうめくもあり「ナーニありヤ矢ツ張り鉄砲だらうヨいつもの燕口の」ト心得顔に笑ふて氣に留ぬもあるべいかし抑もく喜右衛門の如き吝嗇頑固の人物が如何にして婦人に戀慕せしか其由来は如何其熱度は如何にマアこんなものなり

前回既に説きし如く我小説の主人公三星屋喜右衛門は一寸井戸端に出かけし時二人の下宿屋のお客さまが喋々延羽根を賞むるを聴き覺えず何の氣なく延羽根を見て成る程美しと思ひたりしがさりとて餘り深く氣に止めしにはあらずさはあれ退いて惟んみれば此人にして美なりと思ひこしそ稀有なる事なれ咄々奇怪なりし感情とやいふべきナレドモ此人も人間の片端なれば正かに物に觸れ事に感じてをかきな氣が出るも無理ならぬ事なり其夜又甲斐なき女子の身を以て母親を養ふとは感心だとをかしよう高尚に感じたりしがさりとて其女の氣質に感じて之を敬するなどいふ譯ではない只々己が天賦なる吝嗇主義に照し見て彼に金儲の腕あるを感ぜしのみ感じて見る目の度重なりて延羽根の容貌益うつくしく見え来りて果ては彼を相見る毎に嬉しい様な愉快の様なじれつたい様なおつりきな感情を惹起すとは何のことかサツテモ分らぬ事なり

然るに或一日隣町の伊勢屋といふ知音より喜び事のありとて麴酒一こん獻じたし夕刻よりお出を待つと使來る御

馳走と聞いて何が偕て今夜こそ珍膳佳肴に有付く時節難有しと打喜び晝飯を減じ夕餉を喫べず此家を音訪れしによくこそ御入来イザこちらへといふ主人の勧めにズツト打通る坐敷の内外にも客は七八人暫くすると酒肴を取出しての待遇接待委員の中目かどに立立派な女之を見ると喜右衛門忽ちハツト驚きしも道理是なん延羽根なり彼は此家と如何なる縁故あるものか不審と思ふ内主人は喜右衛門に向ひ是なる娘の父はもと相應なる商人にて某とは別懇の間柄然るに四五年前に没して其より此かたは母と此子とが幾その艱難今では漸く朝夕の煙それも充分とはいかねど皆様の御愛顧で細く立つる身の上又此頃ではお身の貸屋に引移せしものどうぞ宜敷といへば延羽根も膝を進め「女世帯の事なれば何かと餘計にお世話様になり勝お目掛けられて」トの挨拶喜右衛門は何故か胸の勃突を不思議なこと、押鎮め額の汗を左手で拭ひ偕ては伊勢屋さんと御別懇のお方なるか知らぬ事とて只今迄は誠に御疎遠以來はお心易くと述ぶる内主人は酒を變へ肴も添へさせるに皆々酔が廻はり来りてそろ／＼てんでに戯談駢洒落を吐けど喜右衛門はかゝる事大の不得手いつもならば下戸の肴あらしと早々と出掛る處なれど今夜は延の字の居るに因るか將た又如何なる原因あるか空虚い腹をジツト堪へて皿の上に魚の骨の不器用に卧轉んで居るも「ウソ」だと妙な所へ氣を廻はして箸をひかへ目にすれど何となく手持無沙汰其と見て取る延羽根がかゝる頑固な人物には如才なく其れ相應の話の水向けイヨ姉さんのお酌に限るナカといふ生酔には又其様に調子を合せる程の旨いのも商賣の徳利からへいお酌とつき込む猪口には酒をこぼさねと愛敬をこぼしての抜目なき取廻はしに何れも十二分の酔出て主客無禮講の酒筵最中主人はのさばり出てこれより藝者を招くとの臺辭それ一段と賛成は何れも左の利く連中待間程なく入り来る三味線藝者といふは矢張延羽根客はニコ／＼笑ひながら額へ手を加てての恐悅顔今日第一のお

肴じやア「ヤンヤ〜」と喧しき迄打はやすお座附が濟むとスチャラカサツサと景氣づいたる「アヂヤラ」調子チヤン〜井鉢を叩くあれば一寸一拳藤八来いオツト心得柳にしよと商家に似合はぬ浮かれ騒ぎが今日の内留思〜に響應の歡を述べてイザお暇と立上る陟框をすべり落ち「ヲイテ、」と人の駒下駄我物顔に穿て出たる武藏屋の旦那の肩をチヨイと突き廓は如何と勤めるは粹が身を食ふ志摩屋の旦那それ御同意も酒の咎おのがしゞにぞ出て往く之を見送る家内の人お羽根も共に立あがりて坐敷は静になりけり先刻よりして三星屋は我目の前の珍味佳肴を食はぬは惜しくさればとてあの延羽根の前もありと心の中にて七顛八仆然るに色氣や強かりけん漸やく吝氣を壓倒して今まで半を喰餘して千万無量の無念さを堪忍びつゝ居たりしがと此時嬌敵あらぬを見て又ムラ〜と吝氣起りこを此儘に棄るは惜しかりイデ此間にヲ、さうじやトコセ〜姿をキヨト〜眼兼て用意や爲したりけん最大なる竹の皮を窃と懐より取出して盗むが如く膳部の馳走を餘さず漏さず之へ打込み立上りざま引包み歩みながらに懐へ入れ屈みながらに告別ひ逃るが如くに歸りけり

初喜右衛門は一度延羽根と酒宴の席に一坐し膝を交へて語を換せしより今は其人の姿兒容ちより言語聲音まで行住坐卧に目に付く位これが世にいふ戀慕にやト思へば彌ましに戀慕なれどまだ懇親にさへあらざれば思を通する便もなく伊勢屋で御別懇にと言葉番ひしといへど正可に尋ねて往かんも異なものといふて弟子入りするは店の者へ對しても出来ず又親しくなればとて先きは若き女子の事吾は人生五十の坂知命に近き年をして箇様なことを打明けてマどう言へ様ぞ言はれぬ事と磯の鮑の片思ひ思ひ切らんとしては却つて思ひ出し忘れんしては忘れがたし意馬心猿の狂ふまゝに延羽根の湯に往く頃を計りて毎日物干で見て居るとサテモハヤ猫の盛のついた様な馬鹿々々しき事

なり

○第六回

質屋は何時の頃より我國には開かれけん誠に重寶なる機関になん譬へば牛肉屋へ登樓の鎗線込：入ッた又借の嘉平治平ケツト夜具蒲團の三品を曲てこれでスリ圓だけは是非請求むと「ロジック」應用て口説き込む書生あれば今日おろしたての盲縞の腹掛さては股引をも打殺してこれで五十錢と吹込込込此等を下等種の常得意にして老弱男女晝夜にト。ウント穿ち兒に書たてるは抑陳物の張替同様とても値にならぬといはるゝも癪なりスグニ此邊で黒幕バツタリ普視る本舞臺三間の間正面は帳場格子後に一間の押入其隣には質物大帳流質物賣拂帳、金銀出入帳など筆太に提灯屋流で記せし許多の帳面折釘にぶら下れり上には黒く薫ツた太神宮の御棚御神酒徳利は前けれど煤に掩はれしを見てはいつの頃に神酒供へけん千兩箱を中にして坐したる今戸燒の福助お龜ニコノ然として外を眺むるは神棚に出世せしを喜ぶにや將又金の番を樂むにやさりととは氣まぐれなる此夫婦を如何にも大切氣に崇たるを見ては且は其左手なる壁に掛けたる質物一切九時限りと認めし自筆の掲札が右手なる倉の扉に張つた火の要鎮の御祈禱札と相向ひたるを打見やりては當主人の氣質もしらるれ寔にお氣がツカレたる次第たり帳場の内にテカノ然たるは一箇の藥罐なす頭なり燦然として輝く五分心の「ランプ」と力を合せて隈なくマンベンなく店を照せば店中手を明けて居る者はなし此藥罐なす天窓といふはさして面倒なる者にはあらず讀者も先刻御承知のアンソレ例の喜右衛門なり此方の上り口に腰掛て居る若い男身に洋服を着して口に紙捲煙草を銜たるは書生上りの官員か慥に質種御持參のお客と見えて前なる若者太七と何やら付く付かぬと争へり彼方に小捻を捻居たる二人の小僧

互たがひに目めを見合みあせてニヤリ／＼蓋けだし思おもふに人間にんげんは何事なにごと何物なにものに限かぎらず見みられぬと極きまると「ステキ」に見みたく聞きかれぬと定さだまると矢鱈やたらに聞きたくなるが持もち前まへなりされば智慧ちえさへにまだ短みじかく漸やうやく々ぶがりの此この兩君りやうきんは心しん中ちゆう笑わら止と事じ生せいじたりしも現あらはに笑わらはれぬ事情じしやうあると見みえて始はじの内うちは「ニヤリ／＼」として居ゐたりしが次第しだいに下したを向むくと笑わらひ聲こゑが口くちから外そとへ漏もれる互たがひにチラと顔かほを見合みあせるを相圖あひづに咄とつといふて吹出ふきだしぬ其傍そのかたはらに「コクリ／＼」と舩ふねを漕こいで居ゐたる白雲はくうんの小僧こぞうハット目めを開ひらいて主人しゆじんの兒こをジロリと見ると旦那殿だんなどのは八はちの字じを寄よせて苦にがい顔かほギツクリして四邊あだちを見廻みまわはし又怖またおそ々くしゆじん主人かたの方かたを見みるに今度こんどは「フ、ン」と一人悦ひとりえつに入りての喜見兒きげんよく／＼見みると怪あやしむべし主人しゆじんの兒こは算盤そろばんに向むかふてこそ居ゐれ目は少すくしの働はたらきをもなまざずジツト外そとを見結みつめて手で五玉ごたまをのみ動うごかす様子やうすは恰またながら器械きかいの人形にんぎやうの如ごとく生いきた人間にんげんとは受取うけとり憎にくしコイツ面白おもしろきもの見附みつけたりツと彼白雲かのしらくもの小僧こぞうは小膝こひざを進すすめ眼めを一杯いっぱいに見張みはりて主人しゆじんの顔かほを打守うちまもるに暫しばらくすると笑わらひ兒變こぼへんじて苦にがい顔かほとなり苦にがい顔かほ變かへんじて又笑またわらひ顔かほとなる一喜いき一憂ゆう瞬間しゆんかんに變かはる心こゝろを淨破璃じゆはりの鏡かがみに掛かけて照てらし出いせば先まづ左ひだりの如ごとし（喜）エ、と仙臺平せんたいへいの袴はかまに秋田織あきたおりの羽織はおりで五圓ごえん（と算盤そろばんの五玉ごたまを動うごかし）次つぎが盲縞めくらじまの腹掛股引はらかけひきで五十錢せん 太織おほりの羽織はおり 古織ふるおりの縮入ちぢみ外二品ほかふたしなで四圓よんえん五十錢せん本博多ほんはくたの女帶おんなおび八丈はちぢゆうの女縮入おんなちぢみで四圓よんえん七十五錢せん黒縮くろちぢみ緬べんの羽織糸織はおりいとおりの縮入ちぢみ丸帶まるおび二本別ほんふたべつに下着したぎ右女物みぎめもの十七圓じゆちゆうえん（と段々だんぜん加へて一寸休ちゆうみ）ヤヤ是これはすばらしいのだナ女物斗おんなものばたり……質しちてさへ……新あたらしくてはどうしてもさうサスだに因よつて羽織はおりが六圓縮入むつちぢみも十圓二枚下着まいしたぎが十圓帶おびが二本で二十……三圓……では……マ大鰯おほいかみ合あせて五十圓フーム成ル程五十圓（ト折角せつかく加た數すうを減茶めつちやにして五十圓と置く）○アかういふ風俗なまりを延羽根あれにさせて……丸鬚まるまげに……チンと家のお女房かみま……となつたらどんなもの其時そのときこそは……だがペロ／＼／＼（舌したを動うごかし）真平まっぺい／＼おそろしやく／＼滅法界めつぽうかいもない奢おごりの沙汰さただ驕おごる平家久へいけきうしからずなんでも人

は質素に木綿着物がア、真平々々恐ろしやく／＼五十圓とはヤレ恐ろしやく／＼馬鹿馬鹿しい話だ（と苦い顔蓋し小僧に見附けられしは此ところよりなり）五十圓とはと（餘念なく五玉をのみ勉強して動しなから妄想）五十圓出して絹布ぐる……身上滅却こいつはおじやんだ（と少し考へ）なんだ女房に爲つたのではなし○キツト今頃は彼勢這入り込んで……よせばいくに虎公や熊めが名は体を顯はす遠吠の様なあの聲でおまけに覺が悪いから終には彼もぢれて「さうぢやない斯ですヨ」（餘りに浮かれて延羽根の真似疊を「トン」と右の膝で叩く機會に右の手に力が這入ると五玉を動して居た指で思はずゴロゴロと机より算盤を突き落す驚き拾ひ上げて苦笑ひ）ダガやつらは經師屋連だから歌は附たりか「フ、ン」（と夢中で兩手を腮の下に突かひ）目ざす敵は延羽根かよせばいゝのに怠惰者めらが……イヤどうしても延羽根をあゝの儘で置くのは心配だ女房には出来ないまでも如何かして早く手に入れたい少しの金……出すのは惜しいが仕方がないなにか妙計は……ウムさうだ燕口が心易い彼を甘く抱き込んで「コイツ」は一番……」折柄ガラ／＼と戸が開く頭の上で「どうか」と雷の如く怒鳴る其聲に驚くと同時に手は腮の下を離れて矢庭に算盤玉を「パチ／＼」とはじく夫さへ五玉ばかりとはハテサテおかしき限り暫くして心我に返り苦笑ひをして頭を上げる店先には以前の生酔の官員今入り来りし生酔の男に向ひ「どうも四圓は出来んと三圓五十錢ぎりじや我輩今迄舌戦を遣つたがどうもいかん「出来んけりやそれで宜いではないかえい／＼早いが宜い早い」と何れも一月の飾り海老それさへ三舎といふ赤い顔の連中金を受取るかくしへ突込むそれいト脱免宜しく扱も跳かへツた人々なり喜右衛門は傍なる煙管を取り上げ之に青臭い煙草をつめしが少し多過しと見え膈（首よりはみ出せしを引切りて煙草入へ入れ白木屋の丈八摸擬で脂下りにパツク／＼（喜）それにサあの洋服は嫌だ

のどうも大嫌ひだ着てゐてもさぞ窮屈だらう此節はマア少しはいゝかも知らぬが暑い時分などは尚の事だ……それになんだあの捲煙草は第一無益だ一寸喫んでも一本あるてあれは贅澤といふものじやあれで文明だの開化だのといふて騒いでるがなんの事だか分らぬて……(若)ですが此間外で聞きましたにや斯世が開けて便利第一の世となつては洋服でなければいけないツト申して居りましたが便利かも知れませんが袖もなし裾もないんですから如何さま「あがき」が宜ささうで(喜)あがきが宜いかなんだか知らないがなんでも西洋々とあれも西洋これも西洋々とさへ言へば宜いかと思つて煉瓦に住んで洋服を着て洋食を喫てそんなに西洋がよくてや西洋へ店替するが、いや馬鹿々々しい……それに西洋服は餘程高く當くだらう何も安くつて済むものを骨を折て高いものを着せる事はねへはサなんでも下の者いち目といふのだ……だから世がつまつて……マアそれが証據には御覽じろ昔八百萬石の方様のお膝元と言た時分には土一舛金一舛金の成る木の植所といつて随分金も儲かつたが今ではなかくさうはいかぬ」

折柄潜戸をガラ／＼と開けてヌツト這入るは講釋師の燕口なり今晚はと皆々に會釋し喜右衛門に向つて旦那今晩は先日色々御心配をかけたなにとも恐入りました次第で其後一寸あがらうと存じてなにかト手前にかまけましてツイ／＼御無沙汰を致しましてト頗る丁寧な挨拶振喜右衛門は燕口を見ると忽ち先きの想像を思ひ出して大喜悦「サアこちらへようこそ御出手前も少々御前さんにイへなにそこは端近だマア／＼奥へ「イへこれでモウおかまひなく少々折入つてお願ひの筋が……」さアその願ひは私もイへなに互に出来る丈は……マアそこでは話しも出来ん兔に角奥の坐敷へ」イザまづ御通りの臺詞となり然らば御免と口儀もすみ怪訝ながらに燕口は主の後に引續き奥の

一間へ入る後では皆々「どうも家の「レコ」は（母指を出し）此頃は餘程様子が變はつてるヨ」「左様さだがまさか気が違たんでもあるまいなにか外に心配の事でも……」「今ネワツしが見て居たらネあのネ一個でもつてネ笑ツたりネそれからネ苦い兒をしたりネいろんな兒をしてネ……」「ウムさうか「ヘイをかしいなく」「コレ靜にしないか聞えるぞトンチキ

奥坐敷には主人喜右衛門と机 叩の燕口の二人が檜の長火鉢を境にして互ひに向ひあふて陣取ツたり火鉢といへば此火鉢には甚だ大層なる歴史あり今かいつまんで之を記さんそも此火鉢は今は昔し當主人が此處へ家を持ちし時やなきはらふるたうくやみせききふたおほちと肩を並べてのさらし物價は三朱なるを一朱にねぎりて容柳原の古道貝屋の店先に蓋のない飯鉢や椽の取れた膳と肩を並べてのさらし物價は三朱なるを一朱にねぎりて容易に負けざるをやツつかへしつ凡そ今ならば二時間あまり舌戦辨闘のトゞの結り更に百文はづんで引たくり肩の痛むのを物ともせず擔いで歸りたりし秘藏の一物今では第一の寶物なり

（喜）忙しいかネ（燕）どうもいけませんおい／＼寒くはなりますしそれに虎列的が無くになりましたから少しは宜からうと思ひましたが矢張りいけません不景氣だからお宅なんざアいつも御繁昌でお目出度御せします（といふ内喜右衛門は火鉢の引出しより茶壺と茶碗を取出して凹凸のある古藥罐より日向水の様な白湯を注て燕口に與へおのれも飲みながら）（喜）どうして私の所なんぞも此不景氣では實に弱はりますよ店の方では御前さん喰ひ込みだからネ（燕）如何なさいまして御戲言ばツかり旦那のそこなんざア如何な事が有ツたツてビクともなざるんじやア有ません（喜）さうでないヨ何家の家もありさうで無いのが金無さくうであるのが借金といふがよく言ツたヨ私の家なんぞも此節は内幕はこれで苦しいのサ（と火鉢へ火を積川口出の下等鉄瓶をかける燕口は心の内「へんお老爺

めいやに世事がいゝせそれに茶でもいれる積りか知ら火を起すのは氣候を亂わせやうと思つて」トうか／＼見て居る(喜)用といふのは(燕)ヘイ外の事でもありませんがあの寶の一件で(喜)ハ、それを如何しなさらうといふ…(燕)あの寶を…ありやア全体マア八十圓はする品なんです世間並の相場にすると然し私の身に取ると彼は先祖傳来の寶物ですから百圓でも二百圓でも手離すことは出来ないんですが…そこで先月あれをネソレ十五圓と利子の方へ抵當に…少々急入用も出来やしたしどうかモウ十五圓拜借致したいんですが何卒か此儀を…ト頭を下げる喜右衛門は火箸で灰の中を搔まわしかき廻はしては灰の固まりを探し出しそれを亦勉強にも隅の方へ運送して居たりしが之を聞くと火箸を灰の中へズイとおつ立て兩手を其上へ置きて異に返身になり返身になりて燕口を打見遣り)(喜)イヤそれは何だヨあの品は成程三四十圓…サア八十圓になるかも知れんが八十圓に賣るには品物を寐かして氣永に上等客を見附なければならんテもしかねそこで道具屋に賣るとなると三十圓にも怪しいテだから今私が預かるには二十五圓より上は附けられませんが(燕)どうもさう承りますと誠に御尤ではあります私も此頃の不景氣殊に虎列の以来は益大藏省不都合で實に喰込む斗りとても十圓なくつては如何しても此月が送れねエ様な勘定なんで誠に當惑致して居るんです右の譯ですからなんとも御無理な所ではござりませうが七重の膝を八重に折入て願ひますがどうか一ツ御都合なすつて下さいませんか決して流す様な事は致しませんから(と言はれて喜右衛門胸勘定「彼典物はどんなに安く踏んでも八十圓のものはあるテ今棄賣にしても五十圓はたしかだチヨツ三十圓貸て遣れそれにこつちにも…」と決心し)成程それは定めてお困りだらう如何にもお氣の毒だからお望丈用立ませう外の人では届ぬがお前さんの事だから大負に負て(燕)ヘイそれでは貸て…どうも難有

御坐利ますお影様で助かります(喜)では証書を直ぐに書替るか其共明日にでも爲るかどうかとも(燕)へい今晚直ぐに願ひたい物ですが實は証書も書て印形と一所に持参しましたからへい(喜)それではさう」と喜右衛門は金子十五圓と算盤を取り出し利子を去除するやら差引をするやら纏てスツパリと計算を終りて餘れる若干を渡すかと思へば容易に渡しさうな氣色もなし免角する内湯はチン／＼と沸き出す喜右衛門はスツトきはッて十笏の上茶を入れ箆の引出しより何やらの折を持出し菓子皿に積て出すを見るに此はまんまるな「窓の月」頑固と吝嗇に固まりたる角な此翁の御馳走とは扱も不思議な事夢のやうな二三度左右に小首を打振り主人が勸むるまゝ一ツ取て頬張りしが忽ち口をモグ／＼として荷厄介にする様子それも其咎此「最中」は本年の一月ある所より貰ひしものにて爾来月を閲することゝに十ヶ月砂糖の風味は疾くに抜けて恰も砂と同様酔味の出ざるは主人が常に「風をいれる」やら「洒干すやら」百方心を碎き手を盡しての丹精に依るなり折あらばと時節を待ちし今日只今清水の舞臺より落しと思ふてはづみしものなり燕口は一口食ひは食ひしものゝ其味奇といはんか變といはんか妙に怪しげの臭氣をさへ帯びたれば吐き出したきは山々なれども正可にさうもなり兼ねばやツと死んだ氣で丸呑になし急いで茶を飲んでソーツト漱ぐ喜右衛門は終始氣が附ぬ様子靜に茶を飲んで舌打鳴らし(喜)お前さんは一個だから不景氣だといつてもさう不都合は無ささうなものだにの(燕)イへなかく／＼さうはめいりませんんにしる私等のは土臺割前が少いのですから○なんでもお客様相手の遊藝人なんざア此不景氣じや一倍こたへまさア(喜)さういゝなざるが此不景氣以来最も迷惑するのは私共の商賣だらうなんにしる品物を預かる流さるゝ賣うとすると預かつた直より安いのだから弱るて實に質屋などはする物ではないぜ利の薄い商賣だからノ(燕)どう致しまして飛ん

だ事をおつしやるお宅なんざア万と金が倉に喰つてるんですから豪勢なもんです私等の様な其日暮しは往生金佛石佛です早く不景氣挽回の時節到来しなければとても息はつけませんネー（喜）これといふも世がつまつたから
の事さ元私しが若い時分などはお前さんちツとみ、ツちく稼がうものなら直ぐ金になつた物サさうだらうアノ横町の遠州屋などは米屋のトンから突立た身上角の越後屋も湯屋の木拾ひから仕上たの上州屋でも信濃屋でも元は皆一文なしから積上た屋臺骨だすマすばらしいものぢやアないかそれが今ではまごつくと百の錢さへ儲けられぬて（といふを燕口「へ馬鹿メ今の大層なことを知らねエで」と心中舌を出しながら）（燕）ですかネー私等は昔の事はケイム（皆無）知りませんが免角世の中は昔に限つた様ですネ（喜）さうだとも斯んな……ア不景氣といへばお前の心易くすると言ひなすつた延羽根ネよく遣て往くネ女の腕で實に感心なものだネあれは旦那でもありはせぬかノ（と火箸で灰の中へ延羽根の三字を吾知らず書きながら問ふ）（燕）イへ旦那なぞはありません一本立の無疵といふので（喜）ハ、ーさうかネ彼縹緞では旦那を取たらよからうにネ（燕）旦那もなんですヨ取らしてもい、が毎日来るんでは可厭だ時々夜でも来る位のにしたいと言ふので私も見附てくれツて頼まれましたが何も免角に壺といふのは無いもので（と聞くと等しく喜右衛門は小膝と共に顔を突き出し）（喜）コリヤア不思議難有い毎日でなく時々夜おそくなつて如何さまそこらが丁度好と（吾を忘れて喋りしが心附て少し考へ今度は出直して）私の方にまさういふ女を探してる人があるて（ハ、とぼけるな氣狂ひめト燕口は舌を出して）（燕）へーそりやアぜんた
い何處の誰でどういふ性来の」ト真面目で聞けば喜右衛門ハツト吐胸を突き言ひたいのは山々なれど言ふのも何やら面目なしとガラにない赤い兒膝すり寄せて小聲でヒソ／＼暫くすると燕口は反り返り返り覺悟はしても「へート」

驚き彌々さうかト口あんごり二三ぶん過て「それでは旦那が」といふを高しと押ゆる喜右衛門猶も近くに膝進ませ顔を合せてヒソ／＼聲燕口は額に黻扱こそ之が爲にお菓子御馳走例になお世辭譚山調子が宜さすぎると思ツたればシカシ此處が大事の幕だこで吹出しちやア十五が煙だ辛妨々々と自分で制して如何にも殊勝氣に聞居たりしが忽ち莞爾と打笑みつゝ今度は燕口の口のみ動きぬ然はあれ聲は依然として低ければ只時々。ネ。そら。なアに。あれは。等の語僅に聞ゆるのみ暫くすると主人は立上りて金を取出しこれを燕口に手渡しなし兔角して証書と引かへる燕口は尻をおつ立て身をこなし常の聲にて（燕）では何れ近日吉左右を（喜）何分宜く（燕）承知しました」と挨拶そこ／＼に立歸りぬ

後には獨喜右衛門が「ありがたい」と轉がる様に額と兩手を疊へ押付けて打伏せになりしが又起擧ると膝を揺すりて（心）燕口は出雲の神だ何れ近日吉左右を……講釋師丈に言ふことが氣に入つた近日吉左右……近日……近日とはいつだらうエ、とかうだに因て今夜「やつ」が歸る明日向ふへ往て話す早速承知する明後日はおれが向ふへ往く様に……フ、ン……フ、ン「エ私の年ですか私は四十六」「ヲやお若いこと三十位にしや……なにしとそんな馬鹿な……おれは五十位に見えるところ人がいふ（急にふさいで）おまけに禿てるて（頭を撫でながら）禿て居ては……といふて今更毛のはへる工夫も……ア有る／＼此間見た「毛のはへる薬」あれを附よう「コイツ」は甘い……が待てヨそんなに急にはへるものか……所が天の助ではへるからおか……フ、ン天の助で……然し俄にはへるのも變だて人が見て……これはお癪止に（少し考へ）大枚五圓といふ金を彼の爲ならばこそ六圓といふ金を……へん月々遣ても……いゝは三百圓から這入るんだから月々……ときめた所が彼方の本尊はどうだな之が一番肝腎だて當人がい

やと「かぶり」を横に振る……ナニその時には親の威光で是非ともとお母に言はせるそこで當人も仕方なからう
……イヤ／＼當時の娘共は生意氣で親のいふことなどは茶にして……さうサエ、何だかどうも是はア、氣にかゝ
る（と急にふさぎ出し）占者にでも見て貰はうか○占は當るに極つててて聖人の作つたものだもの……だが見て
貰ふには金が……」と思へど兎角に當人がウント點頭くやうピントはねるやらかぶりの振方横かと氣になりて
居ても起つても居られねば「エイいつその事見えて貰はうか」折柄頭の上でチン／＼／＼と時計（此時計はあ
る人の典物内々利用して居るなり）九時を報ず「見て貰へ」と立上り下駄を穿くと番頭に向ひチヨツト頼むと出で、
往く

嗚呼回天の才拔山の勇ある剛勢なる人も八算見一の桁を外さぬ利勘の商人も女といふ魔物にかゝりては忍ちに降
參する事多かり我三星屋の旦那殿は慾心三昧の穢土より色界の迷津に「スツテンコロリ」とすべり落ちて智慧の鏡
は朦朧と月さへ曇る秋の夜に流轉無明の路次を出ればさすが大都會の繁昌とて又格別軒を並べる兩側の商店には
燦然として輝く「ランプ」の光り縦横に走せ違ふ人力車織るが如く通る往來の人これ等が築きなす不夜城の街を喜
右衛門八九町斗り歩みしがと視ると左側なる蕎麥屋の出格子の下に一脚の古机をすえ其上の右の方には周易の二
字と陰陽の算木の圖を書き現はしたる細長き行燈左りの方には筮竹をさし込たる筆立机の真只中には算木二組斯
く其々の道具を並べて客待兒の一個の易者床几にかゝりてつくねんたり喜右衛門は突と傍により（喜）一寸見
てください（とせき込んでいふ）（易）ヘイ／＼（といひながらよき鳥かゝれりといふ見えて倩々と喜右衛門の風
俗容貌を打瞰遣り）（易）エ……身の上ですか縁談ですか但しは（喜）縁談です（易）へ、左様ですか」と悠々

然と打點頭うちうなづき數かずさへ足たらぬ筈せいかく竹たけを真ま向むかひに押お戴だいき小聲こゑにて伊勢いせの國くにでは太神宮たかみくう出雲いづもの國くにでは大社おほやしろと八百萬やまろの神かみたちを祈いのる喜右衛門きゑもんは腕組うでぐみをして下くだ打向うちむき「なる程ほど信神しんかみから先まへへこれこれでなくては」と感かんに堪たへつつ聞居ききたり暫しばらくすると易者えきしやは祈いのり終おはり筈せいかく竹たけを二ふたつに分わけて繰算くりかぞへ一ひとつ殘のこせしをどういふ機會きあひなるか机つくえの端はしへ突つつかけると見事みごと「ピン」といふてはね飛ばとばす「ホイしまつたと吐つきやきつあはて周章あはて取らんとして手てを延のばせど届とどかず止とむを得えず立たち上ありて拾ひろひ取るイヤハヤトンマな事ことなり喜右衛門きゑもんは此間このあいだ苦がい顔かほで宜よろしく思入おもひいれあり易者えきしやはやがて床几しやうきに直なはると筈せいかく竹たけを筆立ふでたてにさし算ま木きを取とつて並ならび終おはり一齊いっさい點てんの易書えきしょを取とり出してチヨツト二行ぎやう見たみた斗ばり直すに今度は平假名付ひらがなづの易書えきしょを繰廣くりひろげてトツクリと見終みおはり其儘そのまこれを差さし置ききて頭あたまを撫なで小首こくびを傾かたむけて喜右衛門きゑもんの顔かほを覗のぞき又易書またえきしょを見て喜右衛門きゑもんを打見遣うちみやり小聲こゑにて(易)「こりやあなた婿むこにでもお這入はいんなさうといふ譯わけですかネ(喜)イへ婿むこでは有ありませんといふて女房にようぼうを貰もらうのでもありませんテ(易)なる程ほどさうでせう易えきの表おもてに出て居ゐます婿むこに往ゆく様やうな形かたちが見みえて居ゐて婿むこでないト(いひながら客きやくの心こゝろを計はかり兼ねかねてか手拭てぬぐひを出だして額ひたひの汗あせを押拭おしぬぐひ又假名付またかなづの本ほんを眺ながめて霎時しばし思案しあんの体ていなりしが忽たちまち點頭うなづき(易)これはあなたの御内實ごないじやくになるといふお方はあなたとは餘程年よつほどが違ちがひますネ(喜)へい違ちがひます餘程違よつほどちがひます(と頻しきりに感かん心しんせし風ふうを見て易者えきしやは得意とくい顔かほに少すこしく聲こゑを高たかふし)(易)此易このえきは餘程よつほどいゝ易えきです殊ことに一度極いちどきめた事は迷まよはず思おもつた事ことは早はやくするのがいゝです之これは地雷ちらいだん親おやといふ易えきで地ちは地面ぢめんなり雷らいはかみなり親おやは爺おぢなりとあります地ちといふものは元もと是これ動うごかないものに形かたとりました故ゆゑに「天武天皇開國てんむてんかうこく」の昔むかしより明治めいしの今日こんにちに至いたる地ちには少しも變動へんどうはありません去されば支那しなでは天動地靜てんどうちせいといふて天てんは動うごくもの地ちは靜しづかなるものと定さだめてあります去されば論語ろんごにも「孟子様まをさまは天動てんどうは是耶非耶諸行無常地靜せかひかよしきやうむじやうちせいしやうちやうなしじやくつみらく寂滅じやくめつ爲樂みらく」と説とかしましたそこで動どうは動うごくなりと有ありまして諸しよ

行はもろくの行くものとあります之は共に定靜として居らぬといふ事です即ち天の動くのはいゝか悪るいか常がないといふ事で又靜はしづかといふ事即ち地は靜で消も長ちもせず寂滅とはそこへかう落付くといふことで落つくのを楽しむ譯なのです即ち地はがつしりとして動ぬ物天は常に動くもの故に天を陽に譬へ地を陰に譬へました天は陽だからヨイシヨくと動き地は陰だから……シイツくと靜まります（となにやら「トンチンカン」順序と縮のなき言草を喜右衛門は無上に感心せしと見えいと難有げに聞き居たり易者は猶も圖に乗りて）扱て雷はかみなりですから早いものです迅雷風烈耳を蓋ふに違あらずと申まして「ゴロく」となる耳を塞いでもモウ間に合ひませぬ落ちる時は瞬の間です此雷も元陰陽の戦争です……エ、元来此陰陽といふものは易の骨髓であります易は元陰陽の二ツから割り出しましたのですだから天地の間の物でなんだツて易の差配を受けないものは無いのです……エ……ト何とたいしたもんじや有ませんか其處で爺は俗に「ちやんと」爲つてとか「ちやん」とままとまるか又爺なども「ちやん」といふて総て息子から見ると「ちやん」とした者ですですから此爺といふのは「ままとまる」「きまる」といふ事です扱てそこで此易の地雷爺を手取早く噛み碎いて見ますと地の動かぬ如く一度思ひ立た事は動す迷はず又雷の如く速に其事を行へばままとまるといふ事之をあなたの身の上に當て見ますると此縁談を「どうせう」「かうせう」と迷はず速に御決心なされは必ずままとまりて未はあなたがちやんと爺になりて家は榮え子孫繁昌すとの此通り易の表に出て居ます」と喋り附たり此易者は年頃五十四五五ありて西洋思想は少しもなく支那主義の聞取法問を我物兒に晏氏の御者も宜しくといふ風で床几に掛りて意氣揚々デモスゼニス外へ往け富婁那徒跳といふ辨で机を叩いての講釋振り容体は大層なれど論理學にも因明の法にも暗き証據は竹に木を繼ぐ様なる文句

なるを喜右衛門又無學なれば天地陰陽の理より和漢の事柄を引て説く所此易者は頗る學者だと心窃に嘆賞しつ且つは縁談整ふと聞きぞくく喜ひて聞居たり

是より先き物好の人許多此前に立溜り立止りては去り去りては又来る其中に一個の十一二の小僧何故か手に細筆を持ちしが行燈の前に立止まり易者の兒を視て居りしが何思ひけん筆の先へ唾を付て行燈へいろはにほへと不二のやまゝ山と種々の事を餘念なく書き始めたりされど其身幹短ければ行燈の蔭にて見えず殊に易者は喋々と饒舌の真際中なれば争でか之に氣の付べき丁稚も又幾分か此無學なる演説家の辨に調子付しと見え果ては大げさにぐるぐると丸いものを書くと哀むべし今迄は無傷の行燈忽ち真黒になりぬやがて小僧はソート易者の顔を覗きて餘念なき有様なり此時辨士は演説を終りて易書を片寄せる喜右衛門は感に堪へつゝ聞をりしが此時何の氣なしに前なる人を見る「トタン」に彼小僧と顔を見合せて互に「ギツクリ」小僧は驚き人搔きのける真暗三寶走り往けり喜右衛門はお定まりの見料を拂ひいそ／＼として手の舞ひ足の踏む所小石に躓き轉げかゝるも知らず驅けるが如く大路次の前まで来ると突然塞ぎ出して徐ろ／＼と歩きつゝ（心）ア、今のは丁松らしかつた己があすこに居たのを見て歸ツたが彼奴きつと諸人に喋舌るなチヨツ……如何して又あれがあすこを……ア三河屋へ往たのかな其とも……なんにしろ彼はお多辨だからキツト方々へ吹聴……だがなんの事をおれが……さうサそれは知らないから……若し「彼の口から此事が分らう物ならその時はおれも了見が……ぜんたい丁松はおれを馬鹿にしをるて此間も早く水を汲んでこいと言ツたらずいときや……さいこどの歌を……太い奴だモウ堪忍袋の緒が切れた若し知れやうものなら追ひ出して遣らう」と無駄の心配で我家へ這入りしが別段變りし様子もなし何氣なく問ひ正すに丁松事はナア二別

段何地へも出でず坐敷で船を漕ぎ居たと聞いてホ、大安心

○第七回

鹿を追ふ獵師山を見ず餌を貪ぼるの狐は窶に陥るとかや扱も三星屋喜右衛門は次の日一日を千秋の思ひにて日の暮るを待つ内に漸やく大陽も西に入相の鐘と同時に時計響きて日はトツプリと暮果たり晚餐を喫すると爺は帳場格子に坐して燕口の来るを遅しと待託ける内に暫くすると燕口は延羽根の母親と共に入り来りぬ之を見るより喜右衛門は扱は縁談上上吉易者の言葉果して驗ありと思はずニツコリ(燕) 旦那今晚は毫寒じます(母) 御免くださいまし(喜) ヲヤ之は入らツしやいさアお上んなさい(燕) ヘイありがたう御免ください(とにじり上る(喜) さアお前さんもどうぞ此方らへ奥へお出ください(母) イ、へこれでモウ(喜) マア免も角もおあがんなさい(燕) なアに能うございませう少とこれ(耳を推へて) が遠い方ですから大聲で話さなけりやア分らねへので困りますそれに私が萬事受合て居ますからと(小聲でいふ)(喜) それだツて……」と喜右衛門は一圖意に彼の件と思つて勸めるを何故なるか燕口が頻りに止むるにぞ其ではと喜右衛門は嬉れしき儘に何の思慮分別もなく燕口を誘れて奥坐敷へと打通りぬやがて火鉢を中に坐を定めると額を合せて「ヒソ／＼」話話の内にも喜右衛門はなにか頻りに嬉しき事ありと見えて火鉢といふ牢くして重いものあるをも知らず無闇に膝を進めしが忽ち顔を鑑めて反り返り太き息をホート吐き「それは」と言た切り(燕) なんです旦那この期に及んでなんの猶豫も思案も入るべきかはです宅様なんざア万とある屋臺骨で五十圓や百圓の片は反古同様なもんでさア手をお打なさい／＼(といへど黙然思案の体)(燕) 斯申しちやなんだか無理にお勧め申す様ですがこりや實に大安賣相場外れですぜ今の所六十圓出すの

はちと手ひどい様ですが其かはり月にたつた四圓であの尤物を買占めるんですものを私ならモウ家倉地面も身上も籠もなつちも要ないサツサ持つてけ脊ツてけといふ所です況してこんな約定ならオツト北野の天満宮難有山の子規二ツ返辭で直ぐ承諾です「ウント」言て手をお打なさい手を……と頻りに煽る口車にフワと乗りしか乗らざるか喜右衛門不意に（喜）成ル……よろしい承知した金を出さう（燕）へーお出しなさるよろしいさう事が極まれば善は急げです明日の晩は直様御出張なさい私しお供致します（と油を掛けながら懐へ手を差入れ何かモグ／＼遣り居たりしがやがて一枚の紙を取出し）旦那事は神速を貴ぶとやらです實は金子受取の証書も認めて来ましたから（指示しつゝ）餘まり急なやうですが金と証書を引替にしてお店にお袋も待つて居りますから早く渡して安心させたいんです……是もみんな私が旦那への忠義ですぜなんでも事を早く済せやうと思ひましてネ（喜）イヤどうもいろ／＼お骨折でありがたい何れお禮は其内に（燕）ナア二とんでもないお禮よりか私は此事が甘く往つたのが何より嬉しむ譯で喜右衛門は金取出し五圓札で十二枚数を改て差出せば燕口は証書を渡す互に數と印とを一寸吟味してそれで済み（燕）それじゃ旦那何れ明晩（喜）マアいゝじやア……（燕）へい待つて居ますから（喜）さうかねト立掛るを（燕）その儘／＼却て其方がいゝんです目立ちましちやア（喜）では御免なさい○あちらへも亘しく（燕）へい／＼左様ならと何やら「トツパクサ」と立歸りぬ

後に喜右衛門腕を組て心の中（心）難有とう／＼あれのお影でまうくいつた……六十圓は惜い様だがあれとてもきつと浮はで済む……燕口にはあの典物は燕口には受けられないきつと流す……あの典物は今は少し寐入時だか八十圓のものは慥にある……少し時を待つて世間で……ハ、きつと踊つて百圓には……今のが六十圓此間燕口に貸し

たのが三十圓それに利子やなにやかやで丁度だアハ、ハ、物事はよくなるとなんでもだ此様子では今年の大晦日までは「ステキ」ない、事が……難有イ明日の晩アハ……」と心は有頂天外に飛上りて喜見城をかけ廻りぬ思ふに其夜は臥床に入りても夜の明るを待間久しく心積り漸やくくたびれて寐入る事なるべし

扱も喜右衛門は臥床に入り一寐入りして目を覺ませば四邊は寂寥として臺所には鼠の荒る、音のみさはあれ明方近しと見えて鐘の響き陽に當りて(六日敷當り方)ボンボ、ンボン喜右衛門は底らには氣が附ねど第一氣にかゝるは今夜の事なり一先ツおのれは燕口に誘はれて延羽根許へ往く彼の打扮は箇様々々身振は斯々彼が取扱ひは斯々坐敷の模様はしかく、ならんなど、夢の様なる妄想のみ積りぬ扱も此人の頭は急がしきものなる哉一年三百六十五日少しも休まるといふ事なしどんな少なる事どんな馬鹿らしき事どんなたわいなき事といへどもおのれの身にかゝる事としいへば大海の諸川を容れて餘まさず漏らさざるが如く微塵も残さず腦裏に入れ其原因は那邊にあるか其結果は何れの點に歸するか彼でもない斯でもないと横からも縦からも上からも下からも歸納法演繹法で色々様々に討究して討究し盡すが癖なりとはさりととは大量にして勉強なる健康にして哲學者的の腦髓なる故實に感々伏々の至りといふべし暫くして鶏の聲と共に明烏鳴き朝起自慢の豆腐屋の店で豆を挽く音ギチガタンギチガタン何處へ急ぐ客を乗せてか表には人力車の走るガラ／＼で夜が開ける早家中が起て働き出す喜右衛門も莞爾々々もので起上り衣服を改め帯を占める手さへ心もいそ／＼として朝飯の味も白葱の汁をすゝるも夢現にて喫べ終り火鉢の傍へ坐を構へると腮をなでつゝ、(心)ア餘ツ程髯が生た剃つて貫はうダガ五六日後に剃つたのだから剃つて貫らうのも……イヤ自分ですれ(と立て剃刀と鏡を取り出し湯呑茶碗に湯を注ぎこれで顔を濕すとやがて舌をさへ手助に使ひ鼻の

下を延ばしたり口でへの字の字を描いたりしての剃振り随分異なるものなり。倅剃終ると鏡の真正面に向ひて兒を眺め嬉れしさにニツコリ立て剃刀を仕舞ひながら）どうも自分じや甘くはいかぬ物だそこへ往くと廻りの勝などは手に入つたものだ其もその筈か彼はそれが商賣だから○その替り自分ですれば一文きなか入らぬ所がありがたい（坐りて鏡を見て腮を撫でて）だが能すれた……正可若い時分にはいつも自分で剃て居たから其丈の事はある（頭を見て）此禿た頭てあの女に……フン（と頭を叩き）ア是からなにをしたら……マア湯へ往くか……「シヤボ」を……一ツ何錢位一チ番安いのが慥か二錢かな……どこの唐物屋で……エ、馬鹿な糠といふ結構な物が錢いらずで在るはダガ糠袋が……竹（下女の名）に縫は……せ……るもをかしい其よりかたゞ裂へ包んで糸でぎり／＼捲付るそれがいゝそれ／＼……ダガ糠を出すのを竹に見られるも……よしこれは使に（大声で「竹や」と呼ぶ田舎より「ポット」出の下女襟の儘で入来ると直ぐに用を命じて使に出し遣り）どこかに衣が」と立て簞笥の引出より小裂を取出して臺所に往き四邊へキョト／＼氣を置きなから糠を小裂の中へあけて坐敷へ持歸ると今度は火鉢の引出を開けて小サき箱の蓋を拂ひ中より紺の木綿糸を取出す是は喜右衛門例の仕末人なれば糸屑などの落散るを見ると拾ひ取りては此箱へ大切に溜置くなり扱小裂の四隅を左りに握りて好加減の所を糸にてぎり／＼と睨つと結びて莞爾（心）先これでよし時に何時だモウ九時過か……湯へ這入てこやう晝間湯へ往のは家を持ってからフ、ン○近所の湯へ往くのはなんだか……あすこの湯へ往かう（手拭を持って二足三足）イヤ手拭は借りるとせう歸りに濡たやつを持て居るは……」と手拭は手拭掛へ掛け家の者へは用事ありて上野邊迄往くと偽表へ出ると左りへ曲り右へ切れて或處横町の其名梅の湯へ這入る

午前十時頃の事なれば風呂には客僅に二三人流シの板の間半ば乾いて濡れし所の四筋五筋は細谷川の流の如く左手に堆高く積上げたる三四十の留桶は富士山の形に似たり墨川亭の寄席の「ビラ」は下等芝居の繪番付と共にヒラ／＼然として人招兒なり彼方の棚にチンとして美しくき花瓶の草花は此方の板の間に燦然として見事なる姿見の大鏡と共に目に立て風呂場の景氣を添へたり喜右衛門は湯より上ると四ツ五ツの小桶へ湯を汲み出し其内の一つを「ロハ」と思て惜氣もなく無風流にも時々様にドツプリこぼせば無残なる哉自然と描き出されたる谷川の流れは滅茶となりて消失せぬやがて羽目板に向つて高あぐら頬邊を洗ふとて眼を半眼に閉ちて羽目板を睨むは恰も面壁の達磨大師たる洗方なり顔が濟むと手が濟むと次が胸胸がすむと下腹なり流石は悟道徹底の禪師を氣取る丈の事ありて身の垢を洗ふ事の熱心なる勇猛精進傍目もふらずゴツシ／＼ギツシ／＼は扱も風替の禪師なる哉身の垢を洗ふもよけれ心の垢を清めるこそ怎麼彈門の要旨なるを咄無始の無明を甚麼がすと一問を試たき風情なり湯に這入ること五度体を洗ふこと凡そ一時間半やうやく五体の掃除も出来たか浄湯をあびて上り来り姿見に對して髪を梳り衣を拂つて之を着し又チヨツト姿見を見て莞爾早々と我家へ歸ると正に正午の大砲「ドーン」と空腹に響く折柄持来る晝飯喫べ終ると火鉢の傍に坐して又も氣根と想像(心)扱今夜燕口と一所に彼の家へ往く突然母が出て来るサアお上んなさいと来るズツト坐敷へ通る互に挨拶があるテサア其處だて挨拶の爲様がむづかしひ……マ挨拶色々あるとして置いて……なには無くともわざとと、三々九度の真似彼が飲んで……待ツたり／＼(と首を振り眉を蹙めて)此御馳走の金は……こたへた／＼腹の痛い理屈だぞダガ斯いふ事が度々あつては厭になるのイヤこれは始めてだに因りて……ウムまたあるこれは痛事／＼土産物といふやつがある何を持って往たらエ……となにか思付のものが……

おれは平生あん十人と交際ぬから何がいゝか……いつそ可癪／＼かのさうサ土産は六十圓が土産だどうも驚いた土産だこんな土産は華族でくもななくつては……然し此金が皆自腹切らずして出来る所がおれの腕だ燕口の質でうまい／＼なんでも仕合の風と福の神はおれの家へ斗り（と額へ手を當てニコ／＼）だが色事は金の要るものだ幾許掛るだらう先づ大口が六十圓燕口の禮をきばつて五十錢今夜の入費が五十錢それにまだある最中の折を……アあの折を土産に一つ買足して……まだなんだかエエと燕口が此間来た時最中を出してヲ、茶を入れた……最中の折を十五錢のものとするかさう假合ひ貰らひものでも其文の價は……メて六十圓に甲と乙と丙で一圓五十錢それに茶代が一錢イヤまだ湯銭が一錢總メ六十一圓十七錢……其處で何だツけアツ三々九度話もいろ／＼……媒は甲夜の内に燕口は氣を利す母は次の……間へ……イヤこちとらが次の間だそれからが二人切……なんだか「コム」と舌で腮を叩き）間が悪いナ……フ、ン……フ、ン話しも二人ぎりでは……」（と涎線掛けての心積ふり返りて時計を見るにやう／＼二時）ヲヤ目が如何かして……二時とは（をかしいと目をこすれど矢張二時）時計が狂つては居らぬか知らず平常はモウ……（障子を開けて日影を見るに大陽未仲空に高く地上に落る垣の影もまだ二尺には足らざりけり）エ、氣の長い天公だじれツてい……（顔を皺めしが忽ち目をパツチリと開き）イヤ忘れた着物々々着物は何を……と言た所が糸入の綿入より外には……帯は例の博多腐つても鯛だそこで足袋はチヨツおれのは皆紺だ其上幾度も水へ這入ツて居ておまけに繼だらけ……新しいのを……ナ……ア……に夜だあれで宜いワそんなに餘斗な錢を使つては何もならぬエ、と其處でまだなにかヨ一煙草入……あれを持って往くから好と……みんな出して置かうそれがいゝ往く時忘れると……」立て衣服等を取揃へぬ羽織は丈夫を取得の絹袖一寸見ると新しき様なれど光のなき所に因て推測

すれば一度は「メヒキ」して紺屋の御厄介を被むりしとの評誰が目も違ふまじ帯は餘程の占め古しと見えて博多とは言ながら鼠鳴の爲様もなき傷だらけの夕暮物衣服は流石に新しと見ゆれど糸入木綿の事なれば口を入れるも野暮なり煙草入は煙管を合せてせいぐ二十五錢買上た所が一錢より上はちと願下ゲの方なり扱喜右衛門は衣服を日向にすかしたり或は陰にて眺めたりアレを斯して彼してと種々の魂膽其間も時計を視ることは屢漸やく四時になりぬ今夜彼人に見參はするなれで其前に一度調見せんものと例の物干へと上りぬ

十一月の事なれば四時とはいへど早夕暮太陽は西の空に白搗きて彩りたる雲の端くるくとうづまきし邊唐草の模様めきて妙に見所多くおぼろに霞む明神の森の邊町に歸る群鳥の黒み渡るなかくに風情あれど喜右衛門争で之等に目を注ぐべき彼人や通ると往來を横目に見て佇立むこと稍久しきも影だに見せぬは如何がせしやト本意なげに下り来る程なく日は暮ぬ夕飯も濟みぬ主は店帳場に坐ると早心猿の縛をゆるめ意馬の手綱を放したれば彼等は自由に戀の闇路に狂奔し若くは妾に妄想の境界に喧走して毫も忌憚るといふ事なし其内八時になりぬ燕口は来らず「何をして居る事ぞやをかししく氣の長き男なる哉早や八時を十五分過つるに若し三十分迄に来らざれば此方から立出て往かんと時計と腕競で待くたびれ扱も燕口の来る事の遅さヨ三十分は過つるにマ如何した事ぞじれつたい待つは憂者つらい者とはよう言ツたと賞めるやら憤懣やら今はとて手燭を點して奥坐敷に往き例の天晴立派なる華美着を着して再び店へ出て来り（喜）番頭どんや今夜私しは急用が出来て本所の丸一まで往くが多分泊るから其積りでそして横町の甚太が利息を持って来たらお前假受取りを遣つて置いて下さい（番）へいへい〜畏こまりました（喜）みんな頼むヨよくしまりをして火を氣を付て（皆）へい〜往てらッしやいましお氣をお附なすつて」

といふ時は喜右衛門早や外にあり早々と燕口の家の前軒端に雲時佇立み戸の節穴より家の様を伺ふに真暗にして人氣もなしこれは訝し如何した事と隣家で聞けば今朝出たぎりと聞いて心配一倍し緒は急用が出来て歸られぬかそれともなにか間違でも……イヤ一昨夜の易の表は上々吉障碍の出来理はなしと太息吐つゝ思はずもふりさけ見れば天の原にいみじくも澄める十一月の丸い月を村雲打蔽ふと見る間もなく忽地又晴るゝは雲にはあらず鷹の打つて聲かなしげに過るにぞ有りける隈なく照らす光りには星さへ稀にして僅に見ゆる北斗の劍は妙に愛着の絆を斷ちしか流石に雅腸なき喜右衛門も雲時は碧天明月の美妙に感じて餘念もなげに見惚れけり

折柄何やらおぼろに怪氣なる二ツの形がキラ／＼と斗りに喜右衛門の眼に入りぬ忽ち顔を皺めて能々視れば取て怪しき者にはあらず若き男女が睦しげに手を引合ふて通るなり之を視ると忽ちムラ／＼と妙な氣持になり何いふ工合なるかテモおかしや足は獨手に延羽根の家の前に進み手は自然に格子戸を開くと口が自づから「御免なさい」といふ聲を發したり「はい」と言ひツゝ出来るは延羽根の母親喜右衛門を見て（母）入らつしやいまし」と頭を下げるに喜右衛門は如何してこゝへと始めて氣が付し如く忙然として口あんごりジツトお母の兒を眺め入ること二三分急にドギマギ周章で（喜）燕口は来ませんか（母）燕口……燕口さんは居りませんが何か御用で……ア昨日は厄御介様で難有御ざりましたとんだ何もお手數様をかけましてマアお上んなさい」と流石にソラさぬは世事業家業故なり喜右衛門之を聞くと扱は燕口が居らずとても不都合はなき事ならんそれに弟子さへに居らざるは氣を利しての事ならんと早くも悟ツて（喜）では御免くださいましトズツト通る

此坐敷は六疊敷にて彼方に高き一間の太神宮真鍮の燈明皿は燦然として光り輝き此方に三尺の地袋其上なるは延

喜棚と見えて染付の花瓶には柳青々として立派なり其側には三絃三挺かけられたり延羽根は今朝より甚しく目眩のするに堪がたくて稽古を休み奥の間に打卧せしが夜に入りてより大に快ければそろ／＼と卧床を離れ寝衣の儘なるしどけなき姿にて火鉢の傍兩足を尻の下から右の方へさらけ出して疊に突立たる長羅緒の煙管へ擁りかゝる様に坐りながらほんじやりとして居りしが今しも入り来る喜右衛門を見て訝しげに立上り衣服を改め帯を索める此方の間には母親が喜右衛門に向ひ(母)あなたどうぞ此方へむさくるしい所で」と坐に直り挨拶終る此時延羽根も坐につきてニツコリ(延)之はよく入らつしやいまし」と世辭より先に笑凹を見せ鮮にも白き手をついて頭を低けるに寐くたれ髪の後れ毛が額の邊りにはら／＼としてふりかゝる殊に雪の様なる給りには梅香のかほりほのめけり喜右衛門は心臆してドキマギしながら(喜)誠にどうも……エ……御無……沙汰……致しまして(延)イへ如何なさいまして私こそなんです……此間も伊勢屋へ参りましたら伯父さんが「お宅様へ参上たかと言ひますから」ツイまだと申しましたら何といふ失禮な事だ是非に上らんですはすまん譯だトさん／＼に叱られましてそれでもあなたツイ／＼御無沙汰を致しまして(喜)イへどう致しまして……(間がわるげにもじ／＼して)燕口はまだ参りませんの(延)へイ来ませんが……ほんに昨日はいろ／＼どうも御心配をかけましてなんとも難有御さいました其にお喧ましく御さいませう朝から晩まで子供が出這入致しますから(喜)何の／＼そんな事は御遠慮には……が如何して燕口は斯遅いか(延)なにか御用でござりますか(喜)イへあの例の(少し考へ)エ、金の一條から其れにあの何を(下を向きて)何だッて斯う……あんまり氣樂なやつだ(延)お金といふのは(トけ／＼な顔)喜右衛門は眉を擧め少し性急込んで(喜)あの六十圓です夕夜お袋さんに燕口の手から……ネおツかさん燕口からたしかに

金子を……（と言はれて母娘は驚き兒母は立て喜右衛門の傍に坐はりなほし急たる聲にて）（母）イーへお金ですとへ金なんぞを受取ませんヨなんだか敷から棒のお話で私にや毫末も……（喜）エそれじやア何の爲に夕夜は何の爲に私の店へ……（母）それは私共に今度同居人が出来ましたから其入籍願を燕口さんに書いて貰ひましたら印形があるかも知れないから一所に来てといひますから其れでお宅迄參つたんです」と聞て喜右衛門ツ益喫驚して少し逆上せしと見え眼をすへせき込んで前後の思慮もなく（喜）じやアお羽根さんを私の妾にする其代はりに舊い借債が六十圓あるから其を拂て呉とは……（母）（少し聲を張上げて）エなんですとへ娘をあなたの妾に……とんでもない馬鹿な……馬鹿なことをおひなさるナ何ぼこんな稼業をして居たつて娘の前尻を賣る様なそんな賤しいんぢや……とんでもないへんそんなンぢやア憚りながら有ませんヨ其になんですと人間の悪いあなたから金を……あんまり馬鹿さ加減がたまらない尚そんな耄ろくはしませんヨなんぼ男親がないといつてさう安くされちや……真成に口惜いじやないか」と怒鳴る延羽根は真赤になりて下差向き袖を嚙んで疊を穴の明く程眺め入る喜右衛門は楮は燕口めに欺かれしかと益々ドギマギと震へる手先に紙入を取り出し（喜）だがあなたの印形を押した証書を」と示すに母子は等しく膝すり寄せ證書といふは如何なるものと瞳を定めて打守り言葉はなくて顔を見合せしが娘は立つて用簾すの引出より己の實印を取り出し（延）これが私の實印です」と白紙へ押差出すを以前の証書と引較ぶるに形は甚だ似たれども其大小は稍違へりこれを視るより母子はホット一息喜右衛門は「ハット思ふと血液は電流の如く「ドット」斗りに脳部に上騰し見るく真赤になりて氣は轉倒此坐敷さへぐるくくさながら廻はるやうに思はれたり（喜）燕口メ」と証書を左手にひつつかみ直躬と立つと徒跣の儘格子戸チリ、ンガラくくと開けるも夢中

後も閉ず心も足も地に付かず一日散に我家の前潜戸ガツタンガラ／＼と開るや、電身を横にし奥の坐敷へ這入らんとて隔の障子を逆手に取り引開けんとして推外し倒れかゝるも知らばこそ只一散に驅ケ入ツたり旦那と見るより番頭が何事ならんと「トツパクサ」續いて飛込む目の前にバツタリ倒る、障子をばヨーあぶなしと受とぐめ兩手で右手へ立てかけつ、踏込む室は真暗がり「丁松ヨランプを早く持つてこいランプ／＼」と言棄ておのれは直に奥坐敷へ續いて若者小僧迄打連れて入り来る奥坐敷には喜右衛門が例の証書を左手に臈んで仁王立今入来る番頭を視るより恰も狂氣の容体「ヨー番頭どんか大變だ／＼早く往て捕まへてくれ直に派出所へ……イヤ警察署へ届けてくれヨイ早く手分をして太七も一所に久助は居ないか(番)へい捕捉へるとは誰をです……マ全体如何したんです(喜)誰ツて燕口燕口が……燕口が……(若)燕口が如何か……(喜)如何エ、如何なんぞとおちついちやア居られん六十圓を六十圓を……早く燕口を……六十圓……燕口を手分して……六十圓を……捕へてくれヤイ太助ヤイ久助六十圓……六十圓が……燕口を……持逆をした持逆を……」トンチンカンなる主人の命令元の起は分らねども金を持逆したりと聞き扱は棄ても置かれぬ事さりとて何處へとちまよひてまづ兔も角も燕口方へト急ぎ表へ走り出れば若い者太七は小僧二人を店と奥との番に置きおのれも續いて出往たり奥には一人喜右衛門がランプの前にて例の証書をふるへながら走り讀終ると憤怒の形相ばらりずんと二ツに裂き四に裂き口にくわへてごり／＼と幾ツともなく引裂き引裂たるを丸めて壁へ叩き付け又その壁を睨らんでジート考へると延羽根の姿がチラツと脳鏡に映つる(喜)エ、なさない神も佛も有ものかと突掛け来る無念の涙がまぶたに現はるゝと視る間にはら／＼と雨の如くに落かゝるを兩手でヒタと壓えながら下俯向いてワツと斗り前後不覺に泣き入りたり稍ありて涙を拂ひ我れと我手に髪の毛

を引むしり引むしりては口にわへ口に嚙はへては齒を嚙ひしりて四邊を睨む其形相のすさまじきは心の内に
て戰鬪の修羅の巻を現せし故と推測られて笑止なり折柄歸る番頭手代直に奥へ飛んで入り(番)旦那大變です燕
口の野郎は大盜賊で(若)盜品から足か付き(番)今夜すつかり分りまして(番)警察からは嚴敷い詮義(若)明
日からは帳簿改(番)燕口はそれと知つて風を喰つて高飛しまたと語の未だ終らぬ内に喜右衛門はハツト驚き再
度總身をふるはせつゝ頭をぶるゝと一層強くふるを相圖に最後の血がドツト頭へ昇ると二足三足タヂ／＼後
ずさりして真仰のけに倒れかゝるを辛くも番頭が抱き止める氣轉を利して若いもの太七が手早く布る蒲團の上へ靜
に卧かさんとする時突然(喜)燕口め太い奴だ……延羽根……」と横に仆ぬ

○第八回

木の頭チヨンで舞臺廻はる車井戸の場なり「チヨイトお竹さん聞いたかいあの一件を(トいふはお梅といふ例の
おてんば鼻)「ア聞かなくつてさ三星屋一件だらう(トいふは鐵棒お竹鷲の者字「ハネ金」さんの御臺所なり)右
の兩人井戸側へつかまつてのお喋り彼方に顔を洗ひながら小供にからかつて居たる松といふ職人お梅に向ひ(松)
なんだ／＼なにか騒動が持ちやがツたのかエオイお梅さん(梅)ア、大持上りサホラ三星屋の禿ちやんネ(松)ウ
ムあれがどうしたい(梅)病氣。死にさうな(松)へー病氣に……そいつアちつとも知らなかつたが「デコボコ」め
エさんさんだナ金は取られる女は出来ずおまけに病氣とは泣兒に蜂とは此事だらう……又どうしてあの鬼めが病氣
になつたんだらう(竹)それは斯いふ理さお前も知つてるだらうがあいつが先に盜燕から六十圓騙られたらう其上
に燕口から質に取つたものは元が盜み物だから今度知れてお上からお取上と来らうホラこれも三十圓からの損さソ

ラネそこでアハまく御覧十錢札一枚でも虎の子の様に大事がる吝命が百圓といふ金を無くなしだのだらう大變だネ
此節大熱で浮言斗り言つてるとサ(松) フン吝な男だなアあんな素敵な身代の癖に百圓斗りの目腐金で熱病とは
なんのこつてエあんまり馬鹿げてゐて話にもならぬエ……彼でも東京子敷先祖の助六へ對しても外聞の見ツと
も好くねエヤ(梅) だがお金斗りで病氣になツたんでもないとき第一が延羽根さんが戀しいのだとサ……ダガ「到
底もかなはぬ戀故と斯期極めて」あきらめられ無いからお腹がしつくる返る様なんだとサ(竹) ア、さうだとヨ
其だから上言の内に燕口と延羽根の二ツは離れないとヨ金を返せと言ツたり延羽根さんとこへ往くと言ツたり又起
直ツて燕口は太イ奴だ今頃は何處に居るかあいつを捕へて殺すと言ツたり又延羽根の家へ来る同居人はあれは亭主
ださうだア、口惜しいと言ふかと思ふと又たわいなく浮言を言てとう／＼終にはスヤ／＼寐むつたりそりや大變だ
とヨそれにノ……(梅) オツトお話の中だがネ延羽根さんとこの同居人ていふのは真乎にあの人の御亭主かい(竹)
ア、さうヨ(松) どんな奴だいでこの奴だ(と聞かれての竹は半障子の井戸の方に臨める家を指し小聲で)(竹)
こゝの平さんサ(松) さうか畜生めうまく占めやがつたなヘン平公メー(竹) お袋を脊負たのは三星屋の禿ちやん
だヨ(梅) なんだか可愛さうネ(松) だが畢竟吝者から起つた事ヨ」と寄るときさはると其噂さ忽ちパツト廣がりて
當時裏店一杯の取沙汰なり

因にいふ彼盜賊燕口は如何なる方略を運らして延羽根の印を偽せたりけん本文別段に記し置かねば讀者は不審
なりと思ひ給はん因ツて此處に分説り置くべし

本業盜賊内職講釋師の燕口は六十圓の金を騙取る前夜手段に魂膽を碎き盡して翌日延羽根の家を音訪れしに届

書認めてと頼まれしかば宜しい心得たお安い御用だ名筆振ふべし御覽あれと半紙に頼み通りさらさらく後印
形を押すに臨んで肉を一寸睨み首かたぶけ之は怪しさうだ付さうもなしと火鉢にさしかざして反古にピツタリ
「よしく大丈夫と本紙へピツタリ用向終りて後其反古を携へ我家へ歸ツて後其夜の魂膽ランプと睨めへらで仕
あけ御判板木師の眞似事器用なものなり扱こそ三星屋もだまされたれ笑止笑止

浮世人情 守錢奴の肚 大尾

【奥付】

明治十九年十月廿二日板權免許
全二十年一月 出版

著者	東京府士族	矢崎鎮四郎	神田區裏神保町五番地
出版人	全 平民	大倉保五郎	日本橋區通一丁目十八番地
出版人	全 士族	神戸甲子二郎	京橋區弓町十番地
發兌人		大倉孫兵衛	日本橋區通り一丁目十九番地

注釈

【本文】

- 1 京わらんべ 「京童」。京の都の無頼の若者たちのこと。何かにつけ騒ぎ出す、口うるさい者を指し示す。ちなみに、坪内逍遙は明治十九年六月、大阪の日野商店から『諷誠 京わらんべ』を刊行している。
- 2 荒し吹く三室の山の神 「荒し吹く三室の山」は、能因の和歌「風吹く三室の山のもみち葉は竜田の川の錦なりけり」をふまえた表現。「山の神」は、妻のこと。
- 3 隣家の寶を算へ 「隣の宝を数える」。自分の利益にならない無駄なことをすること。
- 4 滅多無上 一般的には「滅多無性」めつたむじょう。むやみやたら。
- 5 娑婆ツ氣 「娑婆氣」しゃばけ。俗世間の利益や名誉にとらわれる心。
- 6 勇み連 ことばや動作の威勢のよい男たちのこと。
- 7 大平樂の巻物 好き勝手な言い分。いいかげんなことば。
- 8 ひきずり 「引き摺り」。着飾ってばかりいて働かないこと。
- 9 小柳 小柳亭。神田小柳町（現在の須田町）にあった寄席。
- 10 律 法律のこと。

- 11 薩摩屋 薩摩出身の商人、岩谷松平が明治十年に上京し、銀座に構えた店の屋号。当初は薩摩の特産品を販売していたが、明治十七年頃から、国産の紙巻たばこ「天狗煙草」を発売。岩谷は、自分の事業が国益に貢献しているとして、自ら「国益の親玉」と称した。
- 12 文敬 講釈師の一立齋文慶（弘化四年〜大正四年）のことか。永井荷風の「築地草」（大正四年）には、「去年ふと須田町の四辻にて俄雨に逢ひ柳原の小柳亭に馳け込みし時一立齋文慶が村井長庵の一席聞きしより講釋をば此の上もなく嬉しきものに思ひ」とある。
- 13 鈴川 大岡政談の鈴川源十郎を扱った講談。
- 14 伊達 伊達騒動を扱った講談。
- 15 菊五郎 歌舞伎俳優の五代目尾上菊五郎。
- 16 病犬 悪いくせのある犬。狂犬。
- 17 世上のあらで日を暮し 江戸時代文政期の川柳「咄し家は世間のあらで飯を喰ひ」（『柳多留 百篇』）をふまえたことば。
- 18 面黒い 「面白い」をしゃれていった語。近世において江戸の通人や職人が使った。
- 19 烏森 現在の東京都港区新橋にあった花街。
- 20 妹虫ころ／＼の鯰寐子藝者ヨ一寸見ると未通らしいがイザ應来と来ると 客に身を売る下等な芸者を、俗に「転び芸者」「応来（オーライ）芸者」あるいは「寝子」などと呼んだ。また、「鯰」は官員（役人）のこと。

- これらを、子供の遊びである「芋虫ころころ」、「寝る」の幼児語「ねんねこ」に掛けて表現している。
- 21 徒者 「徒者」は、みだらな女のこと。また、「代物」は、売り物になる女を意味する。
- 22 八字髻 八字髻をはやした男。ここでは、「鯨」と同じく官員（役人）のこと。
- 23 權妻 妾のこと。
- 24 前講 前座として講談を演じること。
- 25 ロハ ただ。無料。
- 26 蛭轉たる双蛾 美しい眉のこと。『和漢朗詠集』に、「宛転たる双蛾は遠山の色」（白居易）とある。
- 27 芙蓉の明眸可愛らしく丹花の唇愛敬あり 「芙蓉の明眸」は、蓮の花のように美しい目のこと。また、「丹花の唇」は、赤い花のように魅力的な唇のこと。『太平記』（巻第二十一「塩冶判官讒死事」）に、「芙蓉の眸、丹花の脣」とある。
- 28 沈魚落鴈の姿閉月羞花の粧 「沈魚落鴈」「閉月羞花」は、魚や雁、あるいは月や花が、恥じらって姿を隠すほど美しいということ。式亭三馬『浮世床』（二編卷之上）に、「沈魚落鴈閉月羞花ときてゐる」とある。
- 29 嫦娥 中国古代の伝説に登場する女性で、月の世界に住むとされる。
- 30 吹彈 「吹彈」。笛を吹いたり、琴を弾いたりすること。
- 31 腦天氣の熊さん 「腦天氣（能天氣）」は、調子がよく軽はずみな人のこと。古典落語に登場する熊さん（熊五郎）の通称は「能天熊」である。

- 32 煙草盆 「お煙草盆」。出過ぎた人のこと。
- 33 「ガラツ」鉢の八さん 「がらっぱち」は、粗野で落ち着きのない人のこと。古典落語に登場する八つあん（八五郎）の通称は「がらっ八ばち」である。
- 34 思ふに任せぬ國の迎ひ親々に誘はれ 浄瑠璃『生写朝顔話』（一八三二年初演、通称『朝顔日記』の「宿屋の段」の一節。
- 35 白齒 未婚の女性のこと。ここでは、「知らず」との掛詞になっている。
- 36 地口 一般的な言葉をもじって作った語呂合わせの文句。
- 37 臍の宿替をさす おかしくてたまらないことを意味する諺「臍が宿替えする」をふまえた表現。
- 38 一犬針程に吠えて萬犬棒を傳へる 一人がいい加減なことを言うのと、それが事実として広まってしまふことを意味する諺「一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う」をふまえた表現。
- 39 吝嗇 「吝しわん坊ぼう」。けちな人。
- 40 鉄砲 うそ。でたらめ。
- 41 おつりき 「乙りき」。変わっていること。
- 42 アヂヤラ 「戯あしやち」。たわむれること。
- 43 一拳藤八 「一拳」は、拳けんを一勝負打つこと。「藤八」は、「藤八拳」の略。『西洋道中膝栗毛』（十二編下）にも、「一拳藤八」という語が出てくる。

- 44 廊 「中」なか。吉原遊郭のこと。
- 45 意馬心猿 煩惱や情欲のために心が乱れ、抑えがたいこと。
- 46 鎗繰込 槍の突き方の一つ「繰り込み突き」を、「遣り繰り」と掛けた表現。
- 47 嘉平治平 「嘉平次平」のこと。銘仙織りの袴地。
- 48 打殺し 「殺す」は、質に入れること。
- 49 白雲 「白癩」しろくまのこと。
- 50 浄破璃の鏡 「浄破璃の鏡」じやうははり。地獄の閻魔の庁にあって、死者の生前の善悪の行いを、すべて映し出すという鏡。
- 51 仙臺平 仙台地方に産する高級な絹織物。
- 52 太織 やや厚みのある平織りの絹織物。
- 53 古渡 古くに外国から渡来したもの。
- 54 八丈 八丈島に産する平織りの絹織物。
- 55 質で 「曲げる」。質に入れること。
- 56 滅法界もない まったくとんでもない。
- 57 質素 「たまか」。質素でつまましいこと。
- 58 絹布ぐる 「お蚕ぐるみ」。絹の着物ばかりを身に付けること。ぜいたくな生活をする事。

- 59 経師屋 女を手に入れようと、つけねらう男のこと。
- 60 三舎 「三舎を避く」の略。「三舎を避く」は、相手にとても及ばないとして、一目置くこと。
- 61 白木屋の丈八 古典落語の「城木屋」に登場する番頭の名。丈八は醜男でありながら、江戸で一番の美人と評判の城木屋の娘、お駒に惚れてしまう。お駒に相手にされず、心も曲がってしまった丈八は、お駒を殺そうとして失敗し、逃げるが、後に残った煙草入れが証拠となって捕まってしまう。
- 62 脂下り 雁首を上に向け、煙管をくわえること。
- 63 レコ 「これ」の逆さ言葉。親指を立てた場合、主人のことを指す。
- 64 虎列的 「コレラ」のこと。「虎列刺」「虎烈刺」「虎列拉」など、さまざまに表記されたようだが、「虎列的」の表記も、明治十二年七月二十三日付『朝日新聞』の記事（「彼虎列的除の呪なひとか云ふて」）中に確認できる。
- 65 喰ひ込み 損ばかりして商売にならないこと。
- 66 窓の月 「最中」の別称。本来は、最中の中でも皮が四角いものをこう呼んだ。
- 67 米屋のトン 米屋（搗米屋）で、玄米を搗いて白米にする仕事を行う者のことを示すと思われる。
- 68 八算見一 そろばんを用いた計算。
- 69 一齋点 「一齋点」。江戸後期に佐藤一齋が考案した訓読法によって付された訓点。
- 70 聞取法問 他人の説を自分の説であるかのように人に話すこと。
- 71 デモスゼニス 古代ギリシアの政治家、デモステネスのこと。雄弁家として有名。

- 72 富婁那 「富婁那」。釈迦の十大弟子の一人。弁舌が巧みで説法第一と称された。
- 73 因明 古代インドの論理学。
- 74 真暗三寶 「真暗三寶」。めちやくちやに。
- 75 喜見城 須弥山の頂上にあるという帝釈天の居城。庭園では、天人たちが遊び戯れるという。
- 76 一文きなか 「一文半錢」。ごくわずかな金銭のこと。
- 77 怎麼 「怎麼生」の略。「怎麼生」は、禪問答で用いられる語。いかに。どうだ。
- 78 咄 しかるときに舌打ちをする音。ちよっ。
- 79 甚麼が どう。どのように。
- 80 絹紬 柞蚕さくさんというヤママユガの繭から取った淡褐色の糸を用いて、平織にした織物。光沢は少ないが、張りがあった丈夫なので、裏地やふとん地などに使用された。
- 81 鼠鳴 帯を締めるときなどにする「キュッ」という音のこと。
- 82 糸入木綿 絹糸を木綿糸の中にまぜて織った織物。
- 83 白搗き 「白搗く」。夕日が沈もうとする。
- 84 表 易で占った結果、出た卦けのこと。
- 85 北斗の劔 古くから、道教思想に基づき、北斗七星の描かれた刀劔には、破邪や鎮護の力が宿るとされた。
- 86 ソラさぬ 「逸そらす」は、人の機嫌をそこなうこと。人の機嫌をそこなわない。

- 87 地袋 床の間の脇の違棚の下に作られた戸棚。
- 88 延喜棚 「縁起棚」。客商売の家で、商売繁盛を祈って設ける神棚。
- 89 長羅緒の煙管 羅宇らうの長い煙管のこと。「羅宇」は、煙管の雁首と吸い口とをつなぐ竹の管。
- 90 ぼんじやり 「ぼんじやり」。柔和でおっとりしている様子。
- 91 前尻を賣る 女性が金のために身を売ること。
- 92 電 「いなずま」。動作が非常にすばやい様子。
- 93 とちまよひ 「とち迷う」。「とち」は、愚かな様子を表す接頭語。
- 94 ばらりずんと ばっさりと。
- 95 木の頭 「木頭きがしら」。歌舞伎で、幕切れまたは舞台転換時に打つ拍子木の最初の音。
- 96 鐵棒 「金棒引かなぼうひき」。ちょっとしたことを大げさにふれまわる人のこと。
- 97 デコボコ 「でこぼこ野郎」。人をののしって言う言葉。
- 98 助六 「花川戸助六」。浄瑠璃、歌舞伎などの助六物の主人公。江戸前期の侠客とされるが、実在したかどうかは定かでない。
- 99 お袋を脊負た 「お袋を背負う」。骨牌などで負けること。
- 100 謀判 偽造した印。